分科会「聾史と保存運動」

–ろう者の人間像の発掘保存の果たす役割–

司会・西滝憲彦　助言者・一色秀和氏／伊藤政雄

●西滝　３年前、全国的な運動によって、京都に全国手話研修センターを建てる事ができました。大きな施設で、施設の隣には、職員住宅で４部屋ずつの２階建ての８世帯のアパートがあります。京都聾学校の先生で、又日本聴力障害者新聞の編集長を長らくやっておられた中西喜久司先生が亡くなられました。先生は本等の資料を１万点以上保存されています。奥様よりこれを全日本ろうあ連盟に寄付したいとお話があり、とりあえず連盟の京都事務所に保管しています。他にも長い歴史の積み重ねの資料がたくさんあります。これをどうしたらいいのか、大事なものですから捨てる事はできません。京都・嵯峨野の研修センターのアパートの空いている部屋の半分くらいの広さの部屋が空いているので、その部屋に中西先生の資料を運び入れました。置いておくだけではダメで、目録が必要です。アルバイトを採用して、保存資料の目録を作っていただきました。きちんとデーターベースに目録を入れてあります。肝心の資料の本はダンボールに詰めてしまってあります。その間に、日本手話研究所は全日本ろうあ連盟から離れて、全国手話研修センターに入りました。アパートを改造するための補助金や助成等を、様々な財団に申込みしましたが。断られました。そのような保存のためのお金を出してくれる所はないので、今はそのままの状態です。でもいつかはしっかりした図書館のようなものを作りたいと思っています。日本聾史学会の研究活動の発展と結びつけて、又、保存の仕事ができる団体としても聾史学会がノウハウを持っているし、資料の値打ちが分かる。日本聾史学会と研修センターが共にやっていこうという話が起こっています。どういう形で結びつけていったら良いのかという事は、今後の課題です。そのような３年間位の流れがあります。皆さんで意見を出し合って、将来どのような方法にしていったら良いのか、見通しを作りたい。

●一色　北海道ろうあ連盟のろう運動の立場とは別に、仕事は公務員で北海道の職員です。人事異動があったのですが、前に文書（もんじょ）館という赤レンガの建物があります。その中にあるのですが、他の県の場合は、公文書館とか歴史資料館とか名前は色々あると思いますが、公文書等色々な資料を保存する施設で仕事をした経験があります。

●伊藤照美　早く資料を整理する必要があるが、もう一つ大切だと思うのは、映像の資料、聾唖者の手話の資料、高齢者の手話が、８ミリ映像等で残っています。それをDVD等に移しかえていかなければならないし、高齢の方の読み取りがきちんとできる人が必要です。その人の背景ですとか、どういう状況なのかという事をつかんでいなければならない。それを早急にしなければなりません。今残っている人達を、若い人は見ても何を言っているのか分かりません。先ほど岩手の方で80歳前位の方とお話したのですが、背景が分かっている人は読めますけれども、普通、一般の人には分からず、読めないという事になる。早急に資料にして保存する事を進めると共に、読み取りも整理していかなければならないと思います。

●中根　私は若い時、日曜日のたびに函館図書館へ行って、色々な資料を調べ、そして帰って来るというように、何度も往復したが、すごくお金がかかっていた。歴史を調査してまとめる、報告をするという事、実際には裏でどれだけの調査費がかかっているという事が、経験した人でなければ、よくわからないと思います。そういう経験をした立場から、そういう史料が、あそこへ行けばたくさんある、何でもある、調べたい時はそこに行って全部一発で調べられる、そういう所が、以前から欲しいなあと思っていました。そうなれば、聾史研究ももっと広められるのではないかと思います。

●中澤　資料保存はとても大切だと思います。日本にはどこにも無いので、個人で少しずつ調べるのは大変ですね。資料が１箇所に集まっていれば

便利だと思います。将来的には、今は少しずつ調べたものを積み重ねていくしかありませんが、それらが一箇所に集まっているとゆっくり探せるので良いと思います。カンパのように皆で出し合っていけば良いなと思います。管理の方法もきちんと決める事が必要で、担当者がいないとどういうふうに保存して行ったらいいのかという事が分かりませんので知識を持っている人が必要だと思います。

●西滝　先ほどの講演で、言語は音声・手話共に同等であるという話、日本語には資金を使って建てた資料館があります。それと同様に手話にも資料館ができれば良いなと思います。

●佐藤　北海道だけなのですが、北海道聾史の本を買って読んでいます。以前、中根さんから悩みを聞いた事があり、亡くなったら資料をどうしたら良いのだろうと言われた事を思い出しました。

●吉田　保存というのは大事だと思います。もう一つ、今の70代以上の方々は手話もやわらかく、とてもなめらかで綺麗です。そういう手話をビデオで保存したいと思っています。手話で表現するのを記録するのは大事だと思います。本にするかどうかは分かりませんが討論を色々見させてください。

●長尾　私は財団法人日本美術刀剣協会の会員になっています。その協会には二階は博物館で見学ができる建物があり、その隣に資料等の保存館があります。そこは、皆からの寄付で大きくして行ったのです。会員２万人、お金持ちが多い。でも皆さんは給料も少なく、寄付も少ないと思います。別にもう一つ、発表したように刀剣について話をしましたが、それ以外で竹細工や陶芸、昔のろうあ者が作ったものを集めて調べたいと思います。

●松延　私の大学が京都で、歴史の勉強をした経験があります。大学の卒業論文もそれで書きました。今回の保存の話ですが、４年前の大阪の大会の時、保存が必要だという話になりました。私の報告の資料にも保存が必要だという文章が載っています。皆さんで集まって、やっていきましょうという事になって、私も参加しお手伝いしたいと思います。

●早瀬　仕事は東京都の大塚聾学校の小学部で国語と自立を担当しています。聾の歴史について勉強しています。聾の歴史についてだけでなく、例えば、杉並、立川等東京の聾学校の歴史を選び、色々調べています。２つ問題があり、１つは、資料が無い。ほとんど、私や他の聞こえる先生が自分達でかき集めて自宅に保管している物が多い。私も夜出かけて探して集めたものを家に保管してあります。大塚聾学校は２年前に改修され、綺麗になりました。閉校になった学校の資料が沢山あった筈なのですが、意外にもその資料の使い方を聞いても、資料の行方を聞いても誰にも分かりません。捨てられたり、燃やされたりしてしまっているのではないかと心配です。石神井聾学校が２年後に閉校になりますが、その後資料はどのように使うのか、東京都はどう考えているのでしょうか。閉校後の跡地に資料を集めてはどうかと思っています。子ども達に伝えていきたく、江戸時代や昔の人達の事、昔の聾唖者の事、更に今生きている皆さんの事、ろう運動の事、頑張っている人達の事を伝えていきたい。これからの子ども達に、自分が死ぬ前に今からきちんと保存や資料の集め方のルールを作って行きたい。

●西滝　早瀬さんは大塚聾学校の先生としての立場から、資料が必要という事です。全日本ろうあ連盟からも仕事をお願いしています。記念の映画、全日本ろうあ連盟の60周年史というのを考えていただいております。

●高嶋　事務局長をしています。19年前に協会に入りました。9年前に協会設立50周年記念の資料を全国と同じように作りましょうという事になり、「拓魂（たくこん）」という本なのですが、いつも中根さんと一緒に資料はないか、新聞や本を探して作った事がきっかけで興味を持ちました。又、協会が出来る前、鈴木福子さんという方の家がお金持ちで、その家に集めた古い資料がたくさん保存されていました。亡くなった後、息子さんから協会に寄付されました。整理されておらず、かび臭いものもありますが、量が膨大で、整理をしなければいけないと思いながら、ずっと眠ってしまっている状態です。保存の方法も整理しなければならないが、仲々難しいですね。そういう事がありましたので、話を聞いて生かしていきたいと思います。もう一つは8ミリビデオで録っておいたものがあり、去年から8ミリをDVDにダビングする作業をしました。ほとんどビデオはDVDに移しました。

●石川　研究や資料がどこにあるのかを探すのはとても大変です。又資料が少ないので、確保しにくいという事がありますので、やはり保存する場所を作って、そこに資料を集める方法を知りたいです。皆さんと情報交換をしながら、良い方法があれば、これから保存場所を作りたいと思います。
●佐々木　盛岡聾学校の校長を長くやっていらした大石先生が退職された時、「資料がたくさんあるがどこに置いたらいいか。保存場所はどこですか?」と言われましたが、相談をしたいと思います。
●西滝　今の新しい話として一つには、東京の石神井聾学校を閉校後、資料館にしてはどうかという話。盛岡聾学校の資料をどうしたら良いか?という話もありましたね。他、話が色々あって、急がなければならない事があると思います。特に聾学校のこれから危ない状況、それに対してどのようにして行ったらいいのか。何か意見があれば出してもらって、運営委員会で対策を考えられると思いますので、考える材料にしたいと思いますが、聾学校関係でどういう対応が必要なのかという事から討議したいと思います。早瀬さん、石神井聾学校について、具体的なプランがあるのですか?
●早瀬　東京都の例ですが、石神井聾学校と大田聾学校高等部が今後平成21年に廃止になり、杉並聾学校と石神井聾学校が統合され、名前が中央聾学校になるという事です。大塚聾学校は中央聾学校に組み込まれ、建物が１階～３階とあって、２階に大塚聾学校、３階は中央聾学校になります。将来、杉並聾学校と石神井聾学校、太田聾学校も移ります。その後21年からは石神井聾学校の跡地をどうするのか、東京都も考えていると思います。今はどう使うのかまだ決まっていません。先生達は聾学校の資料館にしたいと都に申し入れをしていますが、東京都が決める事です。まだ、はっきりと決まってはいません。必ず資料館を作って欲しいと、その事は上にあげていく事はできると思います。又、東京都の普通学校もたくさんあり、渋谷、新宿等、生徒は減ってきていると思います。東京は土地が高いので、引っ越す人も多く子どもの数も減っています。江戸川区等マンションが建ち、人気が集中して人が増え学校が足りない所もあります。逆に、新宿のように閉校になった跡地はどのように利用するのか。その事を考えなくてはなりませんので、嵯峨野みたいな所が良いと思います。東京都の学校跡地の利用法について、ろうあ者からも案を提起し運動して行けるのかなと思っています。もう一つ、実際に石神井聾学校が無くなった後、たくさんの資料を誰が管理していくのかが分からなくて心配です。特に、今後聾学校の統廃合や閉校する前に確保しておく必要があります。すばやく確保するだけではなく、具体的にどのような活動が大切なのか考えている所です。
●長尾　仙台の大学にいた時、資料館があり、聾の女性の方が学生と一緒にアルバイトをしていたのですが、たまにアメリカへ行き、50州の中、廃校になった資料を少しずつ大学に寄付していました。そのように筑波大学は４年制がスタートしましたが、そこに寄付したら良いと思いますが?
●西滝　筑波大学は聾の歴史を教える大学に変えていかなければならないと思います。今、その一つの案が出ました。他に聾教育の関係で、資料をどう集め、保存するのかという良い案、地域での取り組みがありましたら、教えていただきたい。
●中根　今はもう亡くなったが京都の九鬼先生にお会いしました。聾学校の資料の保存はどうなっているかとお尋ねしたら、年度終わりに、先生達が整理して捨ててしまうのです。捨てる資料が山になっているんです。九鬼先生はそれを見て、「捨てるんですか?、本当に捨てるのですか?」と先生達に聞いたという。自分はその史料を自宅に持ち帰って整理したそうです。亡くなる前に、家には資料がたくさんあったと思いますが、亡くなられた後、その資料はどうなったのでしょうか。たくさんの資料があったので、その資料の処理に奥さんが困っているんじゃないかと思います。もう一つは、学校を辞めた先生方は意外と貴重な資料をたくさん保存しいます。大原先生が古い資料をたくさん持っていて、亡くなられた後、資料がどこへ行ったのか、行方不明になっていると聞いています。それは大きな問題です。研究途中の資料や「手話の知恵」続編を発行するために集めた資料ですが、どこへいってしまったかわからない状態になっています。以前ある古い役員から資料はどうしたら良いかと持ちかけられました。普通だと、捨てられてしまいます。100年以上の前の史料なのに、あっと思ううちに捨てられて燃やされ

てしまうのがよくある事を知らなければなりません。せっかく持っている人がいても、無くなる恐れがあります。ですから、機敏に対応する体制を作らないといけないと思います。

●西滝　九鬼さんの資料はそのまま家にあるでしょうか。一人一人、持っているものを集めるのか、組織的な活動が必要だという事ですね。他に何か資料を集める良い所とか、宝の山は他にありませんか?閉校した聾学校とか、聾辞めた先生とか、古い幹部だとか、どこかに資料はありますか?

●中根　聾学校の中で、古い資料を持っている所ははっきり分かっているのは、滋賀の聾話学校と筑波聾学校同窓会です。滋賀の聾学校の場合、調べたいと申し出ても仲々大変なんです。校長から許可してもらって、やっと資料館の中に入るのですが、中はきちんと整理されたたくさんの資料があるんです。西川吉之助の資料ですが、ほとんど埃が積もっています。鍵を開けて中に入るとかびが強くにおいます。その資料の埃を払って、調べました。コピー室に行くのにも10分位かかるんです。お金を払ってコピーして、又戻って、又コピーするのです。管理はきちっとしているけれども、埃をかぶっていたり、だんだん保存できなくなるという状態も出てくるかと心配しています。筑波聾学校同窓会の所は、資料がごちゃごちゃのままです。口話教育時代の石黒晶先生が亡くなった時の資料も寄付されてそこに保存されています。プレハブを買って、そこに入れてあるんです。鍵をしたまま、又臭くなっているのか、誰も管理していないような状態であると聞いています。整理番号もせず、そのまましまっている。宝の山がそこにあるという事は分かるけれど、私達研究者がそこまで辿りつけない。先生の紹介状がないと調べられず、難しいと言われました。同窓会役員ならすぐに調べられるらしいと聞いてうらやましいなと思います。でもそのような保管場所に置かれたまま、100年前の資料もそのまましまってある状態です。これでよいのでしょうか。

●西滝　大阪市立聾学校は建て替えの新しい校舎に資料室があるのですが、担当の先生も若いため、昔の事は分からない。綺麗な本はそのまま、古い本は捨てるというように、専門的な知識がないのだと思いますが、きちんと保存をしていないという事です。それに比べたら、100年保存してあるという事は素晴らしい事だと思います。それぞれの学校によって資料の保存への考え方も違います。ですから、これから聾学校がなくなっていく時に、どういうふうに資料を集めるかというのは、本当に当面の差し迫った事だと思います。

●伊藤照美　都立の聾学校へ廃校になった学校の資料をもらうと言っていかなければならないと思います。役所は保存期間があり、色々種類別にして保存したいしたいという事をはっきり示すべきだと思います。公文書であるとか、紙の資料であるとか、保存がいつまでだとか、個人のプライバシーもあると思います。学校の文化祭の資料とか、色々な資料があると思います。何が欲しいのか、はっきりこれとこれが欲しいと言う事が大切で、そうしないと貰うのは難しいと思います。もう一つ心配な事は、都立聾学校へ資料が欲しいと言うと、都が言うのは、ろうの歴史とは関係ない、聞こえる先生にとって聾学校がなくなるのは関係ない。特にろうの歴史や聾学校の歴史のために資料を保存するという意味がわからない。聾学校を卒業した学生が記念のために大事だと言うなら分かると言われる。都の施設に保存するのが難しいという事を分かってもらうのか、とにかく色々な考えがあると思いますが、聾者が自分達で集めたほうが良いのではないでしょうか。お金を出して買うのは大変ですが、都に期待する事は仲々難しいと思います。みんなが集まって、聾団体関係者として確保をしていく必要があると思います。聴者、聾者関係なく、値打ちがわからない人にとっては関係ないですよね。難しいけれど、聾団体が主体となって集める方が良いと思います。東京都の団体としてハッキリ、これとこれが必要だと要望する。そして内容を確認し、調べてから許可をもらって譲り受ければ、良いと思います。先に種類をハッキリ出す。何々の文章が欲しい、全部欲しいのか、個人の物や学校内部の物、どういった種類があるのか私は分かりませんが、ハッキリ言わなければ難しい。どういう分野で価値があるのか、職員なら価値が分かる。大事な資料、例えばガリ版で刷ったような資料がとても大切ではないかと思います。それを保存する。申請の仕方が大事なので、貰い方を考える。ただ欲しいと言って

も何が欲しいのか、必要なのか分からないのが問題だと思います。整理して申請するという事です。
●雨森　私の案は、各地に聾学校はたくさんあって各校に手紙を出して送って、資料の保存について、問い合わせをしたら、把握ができると思います。それを集めたら良いのではないでしょうか。
●伊藤　私の経験も経験があります。聾教育やろうあ者の歴史を探すのが趣味です。しつこく色々な所に行って、裁判所の資料館、東京都の図書館、等、細かい資料まで調べています。ある時、地図でたまたま家の近くで、四ツ谷に消防署があるのを見つけ、「あ～消防署があるんだな、火事の時にはここから出動するのだな。」と思い、以前江戸川の火消しの歴史を展示してあるのを見た事があり、そこにも資料があるなら見たいと思いました。聞いてみると、消防署の６階に資料があるという事で、私が調べてみたいと言うと、「どうぞどうぞ」と通されました。消防の関係の本、それが一番上と言われ、珍しい資料がしまってある所を見る事ができました。明治3年から東京市の盲ろう者の家に訪問したという資料がありました。これは大事な資料だという事で、コピーしたいと思ったのですが、コピー機が無いので、書き写しても良いですかと聞くと、どうぞと言われ、何度も通い書き写しました。明治3年から8年までの間の資料を手書きで写しました。今でしたら、カメラがあって良いのですが、昔は無かったので書き写して家に保管してあります。後で行ったのですが、「もう、ここには無いです。東京都に移しました。」と言われ、都へ行って調べたいと申し出たのですが、「このような資料は知りません。」と言われ、「いや、ここへ移されているはずなので、調べて欲しい。確認してください。」「消防署で、いついつここへ移したと聞いたのだから有るはず。もう一度確認してください。」と言って待っていたのですが、上役の人が来て「確認したが分からない。他の人にも聞いてみましたが分かりません。すみませんが無いようです。」と言われました。無くなったので私は残念で、残念で本当に悔しい思いをしました。ただ、手で書いて写したものは家にあります。とても大切で少しずつ整理をし、本にまとめたら皆さんへ配っても良いと思っています。ぐちゃぐちゃにしておくのは嫌いなので、きちんと少しずつ整理をしてから差し上げます。もし、私が突然亡くなったら、今まで書き写したものが沢山ありますので家に来て調べて下さい。私が調べたものは、少しずつ出して行きたいと思います。私はケチではありません。大切な物を私だけが持っている事はできません。皆さんの物でもあります。この資料の新しい分科会があって、とても良かったです。私にぴったりです。整理するのは私の仕事です。
●一色　今一番心配なのは資料がバラバラと言うか処分されてしまっている。過去の歴史が失われていく。将来から見て、現在がどういう時代なのか分からなければ研究もできない。行き詰る事も出てくる。歴史を将来に残していくという事は大切な問題です。でも、仲々一般の人達の理解が浅い。これは、聾の歴史だけではなく普通の歴史も同じです。例えば最近、市町村の合併がありました。平成の大合併で、以前昭和30年頃も昭和の大合併というのがあった。市町村が集まって大きな街になりました。小さな町や村の役場の文書の歴史、明治時代の状況が書かれたもの、その時書かれたものが色々あります。全て廃棄されてしまい、村の歴史がわからないという事もあります。村史という本を読めばわかるが、具体的にこれは何かという事は分からない。基の資料はないのです。そういう事があります。平成の大合併の時も同じ心配があった。聾学校も将来、特別支援学校で合併してなくなって行く。又歴史がなくなってしまうという心配も同じだと思います。そういう面で、どのようにして皆さんの意識を高めていくか、難しい問題だと思います。ろう運動として取り組んでいく、一つの方法としては資料の調査というか、誰がやるのかという問題も出てくるが、運動の立場でやらざるを得ないのか。地元の聾学校に、どのような資料があるのかという目録を作って、当然その資料は国民の共有の財産として、特別な人だけのものではなくて、情報公開という事が言われていますから、個人情報の関係では見せられないものもあるが、こんな資料があるとタイトルを出す事。その資料も、もしかしたら100年後には公開しても構わないという事になるかもしれない。色々な基準の考え方がある。そのように、どのような資料があるのかきちんと目

録を作って整理して、公開していく。お互いに情報交換をする。そうすれば学校の先生も、それは捨てられない資料であるという事がわかってくると思います。そういう意味からも、過程を通して、聾学校の先生達と話もできる、意識を高めてもらう事からも少しずつ運動が必要かなと思います。まず、全部しまってある物を全て見るというわけには行かないし簡単では無い。これは聾史だけではなく、他の地域の歴史も同じで大変な部分もあると思います。一方、具体的に今集まっている資料をどうするのか、又色々問題があります。集める場合も、何でもかんでも集めるという事もできない。保存する場所の問題もある。そういう意味で、これは歴史資料として将来大切になるというものは残し、いらないものとの選別をすると言いますか、それも又、どういう基準で選別していくのか、その範囲もあります。先ほど都の聾学校がなくなったら、資料館を建てたらどうかという事ですが、教育関係の範囲で専門になると思う。手話だけのものや色々ありますね。そういう事も含めて、保存施設を建てる範囲とか選別の基準も考えて行かなければならないと思います。もう一つ、よく言われる、資料の保存は現地主義。例えば、北海道の資料も含めて全国の資料が東京に集中するのではなくて、地域の資料はその地域で保存するという考え方があります。それぞれで目録を作って、ネットワークを作って、情報公開をしていく。そういう具体的な論議もこれからと思っています。そういう事も含めて話ができれば、今日だけでは難しいので次の大会、次の大会とあると思います。

●雨森　聾学校を調べるだけではなくて、退職された先生の所に資料がしまってあると思うのです。実際に聞いた事があります。以前教頭をされていた方に聞いたら、退職後、しばらく経ってから資料が送られてきたと言う事で、今もしまってあると思います。生きているうちに皆さんの知っている、地域の高齢者の方に問い合わせて、資料を集めてもらえば良いと思います。

●西滝　辞めた先生は資料を持っていると思います。その方に会って、資料を集めるという事、それも含めて、これからの保存運動を誰がするのか。例えば、東京の話が出ました。誰が受け皿になるのか。東京都にやれやれと言っても、伊藤さんが言われたように、値打ちがわからない人には捨てられてしまう恐れがあります。誰が責任を持って、例えば雨森さんがおっしゃったように、全国の聾学校に何があるのか、目録を交換して、そこでネットワークを作ってから、その中で誰がやるのかという話をするのは大事だと思います。

●松延　聾学校の文書ですけれども、公文書ですよね?それを捨てる場合にはルールがあるという事はご存知ですか?何年間か保管する。その期間を過ぎたら捨てるというルールがあります。それぞれの学校の許可も必要で、聾学校も同じです。教育委員会に行って、文書の保存期間はいつまでなのか、それを確認する。大事な資料はどの位の期間あるのか、その間に整理ができます。捨てるという場合には早い対応が必要になります。そこを分ける必要があると思います。それぞれの地域に公文書館とは別に○○がもしあった場合、取り合えずそこへ持っていくという方法もある。○○館とは別にあります。古い文章ばかりあります。役所の文章の場合は、役所で3年間保存して捨てるか、公文書館へ戻すのかは役所が判断すると思うので、こちらから見て、大切な物を捨てられる心配があります。3年間、役所で保管した後捨てる物と、公文書館へ戻す物とを役所で判断しているのが今の状況です。役所が勝手に捨てる心配があります。それを事前に調べて、行政と交渉する事が必要だと思います。公文書館が無い所は困りますね。文章の保存をする建物を造るにはお金がかかるのでやむを得ないですね。仮の保管場所のような所があるので、そこへ運ばれた物は捨てられる恐れは無いと思います。保管の方法を確認する事。他に大切な事は、今まで話していたろう教育の関係はたくさんあると思います。他にも、社会福祉行政関連の文章もあると思います。厚生省関係も色々あると思います。今、ろう教育では、文部科学省の文章の確認も大切、一方厚生省の中でも昔は内務省だが、今は厚生労働省となりました。そこにもたくさんの資料があります。それを調べたら、何か見つかるかもしれません。国レベルで国立公文書館へ移す。明治・大正の文章を公文書館にしまう所があります。今、役所で使う文章、例えば今問題の自立支援法とか、今起こって

いる通訳の事ですとか、文書の中で調べる必要があります。情報公開制度を使って、それは無料なので、確認するという方法もあります。とにかくそれがあれば、ルールを守っているのか、捨てているのか、まず確認してから実際の運動につなげて行く事が大切だと思います。

●西滝　今のお話ですが、公的な文書保存のルールが必ずあるという事でした。では、どこまでが公文書になるのでしょうか。例えば、昔の写真のアルバムであるとか、公文書ではない雑誌のような生徒会のニュースのようなものが色々とあると思います。そういう物も公文書の扱いで保存が出来るのか。公文書の範囲はどうですか?

●松延　本や雑誌は別です。なぜかと言うと、公文書と言うのは始めから公文書を印刷するという目的のためで、そのまま資料館で保管されるものが多い。簡単に言えば公文書と言うのは、役人が仕事のために文書を作るために起案してパソコンで打ってファイルしてあります。皆さんが役所に行った時に受付の奥に並んでますよね?それが公文書です。本とは違います。別の物です。本は、始めから販売目的で、資料として買って整理しておけるもので、公文書は買えません。役所で仕事のために作られた文章なので、それを押さえて調べるという事です。それを教えてもらって調べる必要があります。役所で仕事のために作った文章を皆で取り寄せて確認する事が必要であるという事です。新聞等が、図書館に保存されているのと関係ないのですか?選ばれたら保存する、選ばれなかったら捨てるという事ですか?歴史的に大事だと思うものは残しておきますが、関係がないと思う物は捨ててしまうかもしれない。

●西滝　だから、聾学校が潰れる前に集める必要があると思います。集め方については、どういう運動があるのでしょうか?学会で何か方針はありますか?

●中澤　何年前か忘れましたが、京都の聾学校100年記念史、岡本稲丸さんという方が編集して、発行した100年史がありました。茶色い重い本で1万円位で売っていましたが、私はたまたま読んで面白かったです。明治の創立から誰が卒業したのか、色々参考になるような資料がありました。京都の聾学校の資料室にしまってあるらしいです。私は一度京都へいろんな珍しい資料を見たいと思い、資料を見せていただきたいとFAXしたのですが、返事がなかったのです。その後、京都に住んでいる京都聾学校を卒業した友達に、聞いたのですが難しいのではないかと言われました。仕方が無いので、FAXした紙を持って行ってみると閉まっています。18時から7時までは閉門と書いてあるので、インターホンを押すと若い事務の女性が来たので、私が来た理由を説明するためにFAXを見せて、中に入れてもらえました。教頭は話ができる方で、見学しても良いふうに言われました。学校の内部を全部見学したいのではなく、資料室だけを見せてください。見たいのは資料室だけです。と言うと、校長室の隣の部屋に案内されました。資料がたくさんあって、パラフィンの臭いがするのですが、これこれの資料を見たいと私が言うと、引き出しを開けてくれました。捨ててよいような物は本当は大事な資料なのです。例えば、東京の物は3月の東京大空襲で燃えてしまってありませんが、京都の聾学校は残っています。横尾先生の色々な資料や絵等がありました。京都にはそういうのがあって、非常に珍しく面白かったです。今、若い学芸員が来て整理中だが、聾専門の鑑定人ではありません。適当に雑に入れて、大事な物はいくつか引き出しにしまってあります。もし、知識ある学芸員が各聾学校に一人ずつ居れば、嬉しいと思います。今まで待っていたものが引き出されて良かったと言われるでしょう。一番抵抗があるのは、誰がそれを公にするかです。しまい込んである物を誰が確認するか、学芸員や知識のある人が居ない。そこが大切だと思います。今後東京はどうなるのか分かりませんが、そういう色々な資料館は誰が責任を持つのか。いろんな場所に本だけではなく、絵や様々な資料、どこに有るのかも分からない。もし、先ほども言ったように学芸員が居れば、判断する事ができるかも知れません。京都も今、番号を付けて整理中と言われました。でも、私には見る事ができないので、心配です。その事について知りたい。

●伊藤　京都の聾学校ですか?珍しい、見せてもらえるとは珍しい。

●中澤　立派な資料室があります。一度行って見たらどうでしょうか。時間がなかったので、目的

の美術関係のものを見せてもらったのですが、少ないです。この部屋の半分位が畳で10畳位です。

●一色　京都聾学校にはきちんと資料室があるという事で、他の県では滋賀県にあるのは分かっていますが、他の県にもあるかどうかもわからないので、先ほどネットワークを作るための目録を作って、情報交換をするという提案をしましたが、その目録を作るのは大変です。時間がかかるので、取りあえずは、全国で資料が保存されている場所、聾学校の資料室ですとか、色々そういうガイドブックのようなものを作って、資料室にどのような資料があるのか、一つ一つは書けないけれど、例えば美術関係のものが沢山あるだとか、特徴があると思う。それを書いて、学校関係者の意識を高めてもらうというのも取り組みの一つじゃないかと思う。お金と人が必要な話ですけれども。

●西滝　そうですね。それは私達歴史の資料の大切さを分かっている人が率先してやらざるを得ないのではないでしょうか。お金の問題もからんできますが。そこからスタートになるかなと思います。

●長尾　３年前位に、全日本美術刀剣保存協会から高橋という方が研究した本を紹介していただいて、印刷会社にFAXしたが、在庫が無いと言われました。３年後、たまたま図書館で見つけて、コピーをしたいと申し出たのですが、認められませんでした。本の最後に著者の名前が載っていました。住所やFAX番号も書いてあり、限定で500部印刷し発行が60年と書いてありましたので、そこへFAXで問い合わせた所、８冊在庫あって、すぐにそれを買いました。３万もしましたが、写真等も載っていて、とても良いものでした。ですから、その本も限定かどうか分からないと思います。

●早瀬　先ほど伊藤照美さんが言ったように、資料にもいろんな分野があると思うのですが、私は特に５つあると思います。１つは学校、聾学校の運営に使う資料。人事とかそういうもの。それはあまり欲しくないです。２つ目は、学校の歴史、毎年出すもの。それは読みたい。卒業生の事だとか、誰が入学して卒業したとかそういう名簿とか。３つ目は、生徒が描いた絵や文章。例えば生徒が作った様々な物。４つ目は写真、ビデオ。まずこの4点は、誰が管理しているのかバラバラですね。例えば、写真だったら、メディア担当の先生が持っている。絵だったら美術の先生が持っている。専門がそれぞれ違うので、資料室にほとんどは運営関係のものと歴史。でも、一番大切なのは20年、30年前、ろうの生徒の生き方、生活、考え方が分かるものです。私達が欲しいのは、この３つ目と４つ目ですが、この資料はほとんど捨てられて資料室にはないでしょう。１つ目と２つ目はぐちゃぐちゃでもあると思います。更に資料が欲しいと言っても、５つの内のどれが欲しいのか。先ほど伊藤照美さんが言われましたように、この３つ目と４つ目が欲しいと相手に対して言わなくてはならないと思います。資料が欲しいと言っても、学校側は分かりません。ただ、私は学校に入って６年目ですが、学校もだんだん変化しています。創立60周年ですが、70、80周年の時、資料をまとめて本を発行する時になって、今までの資料が大切だったと気づくでしょう。何故なら、以前のように閉鎖的な学校では、口話教育は恥ずかしいといって本を出すような考えはなかった。今は、資料を集めまとめて、本を作って出すという事を積極的にやっている。昔よりも良くなっています。又、中では資料をきちんと作って発行して聾学校同窓会との強い繋がりをもち、同窓会の昔の資料はとても貴重なので、そういう所と学校を結びつけて良い関係を作る。良い関係を作ると、資料もまずまず残っていく。逆に、反目しあい、お互いの協力がなければ資料はほとんど残らない状況になると思います。誰が管理するのか。同窓会を上手く使って、学校へ行って資料をおさえ、又確認するという方法もあるかなと思います。

●西滝　今のような運動の仕方、誰が旗をふるか。誰が引っぱっていくか。学会で旗揚げ、呼びかけするのは難しいですか?いかがでしょう。

●中根　聾史学会には傘下に自主的に研究しているグループが8団体あります。北にはかなりあるのですが、四国や九州の南方面がないのです。聾史学会でも毎年、全国の仲間を呼びかけているのですが、九州方面の方は仲々来てくれないのです。そういう状況にあるように全国的な反応は仲々薄いのです。一番良いのは、学会員が250人の一人一人学会員として一つの目標をもって一年間調べる事です。そして共同のテーマを決めて、それぞれの地域の聾学校に資料があるとかどうか、資料

室があるとかどうかというように調べていただき、それを持ち寄ってまとめて整理する。そうすれば早い。でも実際は難しいかもしれない。私達の聾史学会はまだまだ赤ちゃんで、やっと９歳になっています。皆さん、自分の地元に研究している人が２人でも３人でもいれば、グループを作って旗揚げをして欲しいと思います。そうしていただければ、ありがたいと思います。調査も進み、まとめる事が出来るのではないかと思います。

●西滝　今までの話は、学校の現場、公的な場所の話が多かったですが、これからは民間の例えば、鈴木福子さんのような長い間運動してきた人の資料とかもあると思うんですが、それをどう整理していけばいいか。どういう方向でお願いして集めていったらいいか。又その運動はできませんか?

●中根　今の所、自分の住んでいる地域、古い活動者の資料は亡くなった時、学会の運営委員の人が積極的に訪問して亡くなった方の奥さん、お子さん等に良く説明し、許可をもらって資料をいただく。そして手話研修センターに連絡して、そして高田さんと一緒に行ってもらって、お話をして許可をもらって、それを全ていただいて京都に送る。集めすぎても困るという状況もありますが。溜まっていく一方で心配はあります。

●西滝　遠藤さんが亡くなった時、高田さんと一緒に兵庫のご自宅へ伺って、資料を調べさせていただいたのですが、あ、これもある、あれもあると、色々とダブっているものが多く、ダブっているものはいらないので破棄して、珍しいものだけ資料としていただいた。でも考えたら、もったいないですよね。先ほど一色さんが言ったように、現地主義という事で、一つの場所に集めるのではなくて、それぞれの地域で。という意味で、それは大阪でいただきたい、和歌山でも保存したほうが良いというように。

●伊藤照美　それぞれの協会で運動していて、それぞれの資料がありますね。聾学校でもあります。それぞれの分野で趣味の物もあります。分野ごとに、整理したりして、ダブるものもあります、足りないものを補っていく。個人の写真は大切です。将来、人の写真を見て誰か分からない時。昔の写真を見て裏に名前が書いてあったりしますね。昔はよく書いていました。それを見ると、誰か分かるわけです。これは誰？と聞かれても、皆知らないという事があるので、写真もきちんと名前を書いて整理したほうが良いと思います。音声言語と手話の違いもあります。そういう事も書き残しておく。文化の事手話の事はなくなって行きますから、手話を映像で見ても分からなくなる。だからそれは早急にやらなければならない事です。文章を紐解いていく。手話はわからなくなる。だから早急にやらなければならないと思います。

●早瀬　案を２つ思いついたんですが、すぐできる事です。一つは来年、全国ろうあ者大会が香川で行われますね。60周年記念で、たくさん2000人くらい集まるんじゃないかと思いますが、その時皆さんに、一つ資料を持って来てもらう事をお願いするという事です。資料というのは先ほどの、現地主義という考え方です。例えば、香川とテーマを決めて香川に関係した物を集める。たくさん集めるのではなく、分野を決めて鑑定する。テレビでやっている鑑定士団がありますね。鑑定して価値を判断し、これは高い物だというような。あのように、鑑定員が評価すれば良いと思います。皆、資料を見ても価値が分からないので、これがいい物だと分かったら良いのではないかという事です。もう一つは2000人も集まるので、聾唖者の人に来てもらって、ビデオを撮る。60歳以上の高齢者の方に決めて、お願いして１分か２分お話してもらうのはどうでしょうか？以前、東京都の協会でもやりました。東京都の大会の時に、高齢の聾唖者に来ていただき、ビデオに撮りたいので何か話をしてもらいたいとお願いし、承諾いただき話をしてもらいました。これを全国でやったら良いのではないかと思います。

●伊藤照美　今、生きている高齢ろうあ者のお話は良いのですが、今ある古い物、連盟が立ち上がった頃、撮った古いビデオの整理はまだだと思います。それも含めてという意味ですか?古い８ミリのダビングがまだです。古いレコーダーの８ミリがあると聞きました。早くダビングしないと見られなくなってしまいます。今、生きている方達の録画も大切ですが、昔撮ったものも見られなくなってしまいます。それをダビングするのも大切だと思います。そして文章に残す作業も必要だと思います。そのためには、その期間の背景を知っ

ている人が必要になります。今に分からなくなってしまいます。今、元気でも90歳、100歳の方の表現が分かりますか？そういう問題があります。

●一色　色々あると思います。ただ、団体としてビデオを撮ったというのは最近で、昔は少なかったと思います。普及していないので、趣味で撮った人が多いと思います。８ミリは、今はデジタルテープに変わって、再生するための機械も減ってきています。又、フィルム自体も20年経ったら劣化して、もう見られなくなってしまうかも知れません。特別な保存する施設が必要ですが、どちらかと言うとデジタル化するという事ですね。NHKでもやっています、札幌協会でもやっているという報告もありました。薬品を使った関係で劣化するが、デジタル化すれば画像の劣化はしないのですが、ただしメディアとしてダメになる心配はあります。DVDにしても、まだ10年、20年と言われているので、ダビングを繰り返すという方法が必要です。そのあたり長期的な保存方法がまだ確立されていません。とりあえず、ダビングして保存する必要があると思います。

●早瀬　先ほど私が言った、全日本ろうあ連盟の60周年記念事業でビデオを作っている間に、資料だけでなく、映像・記録も調べてもらって、全国にお願いして珍しい物があるか確認する。連盟事務所にもたくさんあります。以前、休みの間に調べてきました。ほとんど昭和63年、62年以降のものがたくさんあります。その前のものは全国大会で撮ったものはあまりありません。個人にお願いして、連盟としてしっかり撮っているというものは、平成に入ってから撮ったものが多くあります。全国キャラバンや昭和63年に世界ろうあ者会議がありましたが、その時の資料・ビデオは全部残っています。その前の昭和60年以前のものは見た事がありません。昭和40年代から50年代に８ミリフィルムで個人が撮ったものがあると聞いています。ただ、「楽しい日曜日」は45年前、聾唖者が作った映画ですが、ずっと難聴の方の家にしまわれていました。５年前、どういう経緯でその難聴の方の家に５年間もしまわれていたのか、たまたま聾唖者が見つけましたがテープがぐちゃぐちゃになっていて個人ではダビングができなく、専門業者の松竹の中にダビング部があって、値段は高いのですが、そこに出してきちんと直してもらいました。DVDでなくても、方法は色々あると思います。お金はかかりますが、テープを委託してダビングしてもらう。上映会をして運営するという方法等、色々と考えられると思います。

●西滝　聾史学会のホームページでもいいから、50年、60年代のフィルムを持っている人は貸して欲しいという事を載せたらどうですか?

●中根　出来る方法はたくさん考えています。皆さんの情報交換で資料を集めてどうするかを考えて、保存委員会を立ち上げてメンバーを選び、内容をねって、どうしていくかを考えて行きたいと思います。情報提供施設が全国的に広まってきています。そこに資料を保存してもらってもいいんじゃないかと思っていますが、たずねて見ると、厚生労働省と方針が合わないと言われました。テープの保存作業をするのは構わないけれど、資料を保存するというのは方針に合わないと言われました。情報提供施設を作る規定に合わない時は、資料を保存するという役割も兼ねるような地域主義も含めた考え方をしてもらえるように改正する運動をして行ったら良いのではないでしょうか。一番の近道ではないでしょうか。公費があれば、守ってもらえるようになるのではないか、そうすれば当面は大丈夫になるのではないかと思います。情報提供施設へ入れるのに抵抗があるのか、そのあたりもう少し研究して、練って交渉できればもっと広がると思います。全日本聾唖連盟の評議員会で提起したいので、地域からの声をあげてください。連盟の方針として厚生省に交渉していただけるように運動を始めてはどうかと思います。

●西滝　情報施設の話ですが、資料を保存すると提起すると断られたというのはわかるのですが、情報提供という事は認めるのですね。情報提供、つまり昔の歴史の色々な情報を提供しますというと、ぴったりだという事になるんですね。物は言いようだと思います。情報施設がそのような歴史の資料を提供できる体制を作っていく。連盟でまとめて、厚生省に出すという事はできると思います。それは必要だと思います。今まで気づかなかった事ですので、北海道から提起して欲しいと思います。

●伊藤照美　中根さんが言った事で、同窓会の

ネットワークや先ほどネットワークと思いますが、地域を主にして聾学校と歴史、又同窓会とのつながりが大切だという事。例えば、九州には聾史研究会はないそうですが、同窓会はあります。学校には同窓会が必ずあるのですから、例えば「聾学校で聾史の発表をしてみませんか」と同窓会に働きかけていくのも良いのではないでしょうか。繋がりを作れば、同窓会から発表してもらい、その際、資料を集める事もできると思います。同窓会を呼んで発表していただくという方法もあると思います。

●佐々木　岩手県立聾学校同窓会があり、聾史研究会もあります。同窓会と繋がっています。もう一つ、一関聾学校の同窓会と３つ繋がっていて、お互いに資料の貸し借り等をしています。情報施設は個人の物と重なっている部分があるので、展示物等色々な物があります。聴覚障害者用の資料スペースはまだ空いています。視覚関係の資料はきちんと整理され保管されていますので、これらの整理されている資料を参考にして、これから話し合って行きたいと思います。施設が建ったばかりなのです。視覚関係は資料も充実しているので、参考にして同じように揃えて行きたいと思っています。

●中根　情報提供施設の中に資料を保存する。そして情報を提供する場合、学芸員と言いますか、知識のある経験の深い人が採用する。当面は事務員が管理しても、将来的には限界があると思う。やはり、きちんとした学芸員を雇って、資料を管理、整理する。そして貸し出しができるようにする。資料がなくなったり、勝手に持って行かれても困りますしね。

●西滝　色々な意見をいただいて、良い方向が出されました。来年の香川大会に一人一つ資料を持ち寄ってやっていくという話もありましたが、来年の全国大会の実行委員会に話を持っていかないと間に合わなくなりますし、今日出された意見について、連盟として相談の時間もありませんので、とにかく考えた方としては、そのような大会の場を利用して、資料は大事だ。捨ててはいけないという考え方を広めて行きたいと思います。

●一色　初めての分科会で、色々な問題意識が出てきたと思います。本当は残す資料もメディアによって違います。紙の場合、写真の場合、ビデオの場合、動画物等、それぞれ扱い方も違いますし、それぞれに問題があります。収集の範囲もある程度基準が必要です。そのあたりについては十分話す事ができなかったのですが、とりあえず今の紛失を防ぐ方法として、情報提供施設を利用する案も出てきたと思います。ただ、情報提供施設は福祉施設なので、そういう意味では、簡単に認められるというのは厳しいのではないかと感じています。情報提供と言っても、生活に必要な情報で、過去のろうあ者の歴史が生活に必要かと聞かれたら、ちょっと答えられない。やっぱり文化的な要求を満たす施設が必要という事で、今まで全日本ろうあ連盟が交渉してきたのは、厚生労働省がほとんどです。郵政省とか、法務省等色々、文部科学省とかありますけれど、今後手話というのは、先ほど高田さんの講演にあったように、手話は言語として認められる。国連ではっきり認められた。音声言語と手話は対等であるという事が認められましたが、それを受けて日本政府の確認がされていません。その間の運動をやっていかなければならない。それが認められた場合には当然、手話も音声言語の国語と同じような扱いの要求ができる文科省になります。ですから手話の歴史とか、言語の歴史に関わる文化の保存については文科省が担当なので、交渉すれば施設作りについて考えていく事もできると思います。今すぐは難しいですが、何年か後の展望をもって、少しずつ取り組んでいく事が大切だと思います。目先だけではなく、展望も一緒に持つ事も大切ではないでしょうか。

●伊藤　白熱した討論ができたと思います。色々な意見が出て、大変盛り上がって良かったです。それこそデフのパワーだと思います。これからも自信をもって、今後みんなここだけではなくて、もっと声をかけあい、仲間を募って増やしましょう！ろう者の歴史だけではなく、もっとろう者全ての幸せを勝ち取るためにみんなで頑張って行きましょう。

●西滝　聾学校の子ども達に歴史を教える本が必要だという話がありました。その話しを受け止めて、実現できるように我々にも責任があると思います。高田さんを頼るだけじゃなくて、皆さんもその事を覚えておいて、又来年同じテーマで分科会を設けていただき、積み重ねていきたいと思います。